

令和 2 年 6 月 16 日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K20668

研究課題名（和文）抗がん剤による副作用症状としての便秘症状に対する温罨法の効果に関する研究

研究課題名（英文）Effect of Hot Compresses for Severity of Constipation in anticancer drug treatment

研究代表者

吉良 いずみ（KIRA, IZUMI）

大分大学・医学部・講師

研究者番号：70508861

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、がん化学療法中の患者の便秘症状について侵襲性が低く便秘症状の改善効果と安全性が確認された看護技術である温罨法技術を用い、がん化学療法中の成人女性への便秘症状への効果について検討したものである。がん化学療法中の患者の便秘症状を有する対象者に対して温罨法を実施し、便秘に関する自覚症状および排便状態の改善について調査を行った。結果、対象の症状の悪化等で十分なデータを取得することができなかった。これまでの研究では健康な成人が対象であり、治療を実施継続している対象者でのデータがなかったことから、対象選定および疾患を有する、あるいは治療中の対象者への温罨法の実施における課題が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

便秘症状は、抗がん剤の使用前、直後、1週間後等で大きく変動し、薬剤や便秘薬により、便秘に加え下痢を併発することや、化学療法の実施回数や経過による排便状態の変化が示唆された。また、がん化学療法中の患者の温罨法による便秘の自覚と排便状態への効果については、対象の症状の悪化等で十分なデータを取得することができなかった。先行研究では、健康な成人が対象であり、治療継続中の対象者ではなかったことから、治療中の対象者への温罨法の実施における困難性が明らかになった。今後は、便秘に限らず腸動の改善を必要とする対象者への介入研究によりデータを蓄積し、治療中の対象者に対しても実施を拡大していけるように研究を進める。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the effectiveness on hot compresses for constipation, focus on using anticancer drug treatment. As a result, sufficient data could not be acquired due to deterioration of the subject's symptoms. Previous studies targeted healthy adults and did not have data for those who continued to receive treatment. The results revealed challenges in subject selection and implementation of hot compresses in subjects with or being treated.

研究分野：基礎看護学

キーワード：便秘症状 温罨法 セルフケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

がん化学療法中の患者は、抗がん剤により神経細胞の微小管の障害を起こすことから、自律神経機能障害を介して腸管の運動抑制を起こし便秘を来す¹⁾。また、がん患者が疼痛に対して使用するモルヒネなどのオピオイドは、十二指腸での分泌を抑制し、内容物の粘稠度が高まるとともに大腸では蠕動を低下させ内容物の通過を遅延させる結果、便秘症状を引き起こすことが知られている²⁾。がん患者においては、これらの抗がん剤、オピオイド性鎮痛薬以外にも、副作用症状による食事摂取量の低下や日常生活行動の活動低下などにより、複合的または相乗的に便秘症状を引き起こすことが考えられる。特に女性では、男性に比較して便秘症状の割合が高く、プロゲステロンによる腸管内容物搬送運動への関与に関する報告もあり³⁾、性ホルモンによっても排便状態が影響されている状況がある。

臨床現場では、婦人科疾患でがん化学療法を受けながら自宅療養を行っている成人女性に関する調査で、対象者全員が便秘症状を発症し、セルフケアを行っている全員が便秘薬を使用していたことが報告されている⁴⁾。また、便秘薬の副作用症状による苦痛や不快感から、便秘症状が悪化するまで便秘薬を使用しないとといった副作用による苦痛があることが報告されている⁵⁾。便秘薬は便秘そのものを治癒出来ないことに加え、高マグネシウム血症や粘膜の炎症、吐気・嘔吐といった副作用症状が報告されている⁶⁾。がん患者は、がんや治療による身体的・心理的・社会的な影響に加え、便秘症状や便秘薬の副作用による苦痛や不快感も伴うことから、より安全な方法に代替されることが望ましい。誰もが出来るだけ自然な形で、身体に負担がない排便が行えるよう、安全な看護ケアを科学的根拠のもとに提供することが我々看護者に求められている。

便秘症状を有する対象者への看護介入については、排便促進に関する多くの先行研究が報告されている温電法技術がある。温電法技術は、温熱刺激による交感神経活動の抑制と副交感神経活動の賦活化から腸管運動を整える効果がある。基礎研究や臨床研究の継続によりエビデンスが積み重ねられてきた、安全性の高い看護技術であり、身体負担が少なく副作用症状の報告もない。

研究者は、地域で生活する便秘の自覚症状があり便秘薬を使用している健康な成人女性に対して、40 の腰部温電法を実施した結果、自覚的な便秘症状や排便状態が改善することを明らかにした。さらに、便秘症状に対して「便秘薬を使用する」という選択には、症状に対する対処行動としての保健行動が関連することが示唆された。温電法技術は、健康な成人女性の便秘症状には、便秘薬使用者であっても症状の改善効果があることはわかっているが、臨床現場で患者を対象とした研究は少なく、がん化学療法中の便秘症状を有する患者への温電法の効果について、便秘症状と QOL への検討を行った研究はない。

がん化学療法中の患者は、治療のために必要な抗がん剤によって、副作用としての便秘症状により苦痛を生じている。これらの患者に対して、安全性の高い温電法技術による介入効果を検証することによって、がん患者が必要な抗がん剤治療を受けながらも適切な保健行動がとれ、出来るだけ苦痛が少なく生活の質を保つことが出来ると考えた。

2. 研究の目的

便秘薬を使用する健康成人への、便秘症状の改善効果と安全性が確認された看護技術である温電法技術によって、がん化学療法中の成人女性への腰部温電法による便秘症状と QOL への効果について検討するものである。

3. 研究の方法

【第1段階】

がん化学療法中で便秘の自覚症状があり、日本語版便秘評価尺度（Constipation Assessment Scale）が5点以上で「便秘症状の自覚がある」と判断された成人女性3～5名に、「疾患、化学療法の内容、便秘薬使用状況（内容、使用期間、頻度、副作用症状の有無）、便秘薬の使用効果、生活習慣（食事・運動・水分摂取）、便秘症状による日常生活への影響、便秘症状に対するセルフケアの内容（保健行動）」についてインタビュー調査を行った。インタビューと文献検討の調査の結果をもとに、本研究の概念枠組みを作成し、便秘症状とQOLの効果の測定用具を抽出した。

【第2段階】

がん化学療法中で自覚的な便秘症状が認められた成人女性のうち、以下の基準で対象者を選定し、抗がん剤による排便状態の不調に対して、腰部への温罨法により、排便状態の不調や苦痛の軽減について、排便状況及び主観的評価から、その効果を検証した。

1). 対象の選定及びリクルート方法

(1) 選定基準

- ・化学療法2クール目以降の成人女性で、1クール目以降に健康状態の悪化がなく、その他全身状態が落ち着いていて、医師により調査への参加が可能であると許可が得られたもの。
- ・主に、肺がんおよびそれに準じた治療等を行うもの。

(2) 除外基準

化学療法による排便不調以外に心身に影響を及ぼすような副作用症状があるもの
化学療法のレジメンが2クール目以降に変更となる可能性があるもの
全身状態が安定していないもの
胃や大腸等の腸管の術後であるもの
腹膜播種があるもの
以上の除外基準以外にも治療上の理由により医師の許可が得られなかったもの。

(3) 対象者リクルート方法

候補となる対象者を医師または外来化学療法室の看護師に紹介してもらう。
研究者より2クール目の化学療法が研究について説明し、同意が得られたら、調査を開始する。
3週間の調査期間が終了したら、返信用封筒に調査用紙を入れ、研究者迄返却してもらう。

2) 調査方法

(1) 調査期間：2クール目の化学療法開始時の初日から3週間

(2) 調査内容

基礎情報：年齢、疾患、治療内容（治療経過）、使用薬剤、オピオイド・吐き気止め使用の有無、排便不調の経験
排便記録：排便回数、量、性状、便秘薬の使用の有無を記載
排便に関するアンケート：調査開始初日、8日目、15日目の計3回、便秘と下痢に関連する主観的な症状（対象者ご自身の感じる症状）について記載

(3) 介入内容

- ・化学療法開始から2週間目の8日目より14日目までの1週間(7日間)、毎日午後15:00頃から4時間程度、市販の蒸気温熱シートを背中側の腰のあたりに貼ってもらった。

4. 研究成果

便秘症状は、抗がん剤の使用前、直後、1週間後等で大きく変動し、薬剤や便秘薬により、便秘に加え下痢を併発することや、化学療法の実施回数や経過による排便状態の変化が示唆された。また、がん化学療法中の患者の温電法による便秘の自覚と排便状態への効果については、対象の症状の悪化等で十分なデータを取得することができなかった。先行研究では、健康成人が対象であり、治療継続中の対象者ではなかったことから、治療中の対象者への温電法の実施における困難性が明らかになった。今後は、便秘に限らず腸動の改善を必要とする対象者への介入研究によりデータを蓄積し、治療中の対象者に対しても実施を拡大していけるように研究を進める。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉良いずみ、藤原美香、矢幡彌奈
2. 発表標題 がん化学療法中の成人女性が体験している便秘症状の内容
3. 学会等名 第32回日本がん看護学会学術集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----